

沖縄県立埋蔵文化財センター
OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER



発掘調査速報展

2017

沖縄県立埋蔵文化財センター

2017年8月1日◎▶9月3日◎

恩納村博物館

2018年1月16日◎▶2月4日◎

宮古島市総合博物館

2018年2月16日◎▶2月25日◎

目 次

ごあいさつ	1
平成 28 年度 発掘調査実施箇所一覧	2
旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区 (宜野湾市)	4
大嶺村跡 (那覇市)	8
県営首里城公園内 真珠道跡 (那覇市)	13
円覚寺跡 (那覇市)	16
県営首里城公園内 中城御殿跡 (那覇市)	19
白保竿根田原洞穴遺跡 (石垣市)	22
藪地洞穴遺跡 (うるま市)	26
ツツビスキアブ (宮古島市)	30
県内出土遺物保存処理	33
沖縄歴史年表	35
発掘調査のきっかけ (契機) とは	36

表紙写真

	大嶺村跡
	円覚寺跡
	藪地洞穴遺跡
	旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区
	ツツビスキアブ
	県営首里城公園内 中城御殿跡
	白保竿根田原洞穴遺跡
	県営首里城公園内 真珠道跡

凡 例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報展 2017」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製及び転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚、集落跡、グスク、近世墓など約4,500カ所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人たちが残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄県の歴史・文化の解明や研究に役立てています。

通常、発掘調査が始まってから、土器や石器などの出土遺物を整理し、報告書を刊行するまでには数年の歳月を必要とします。そこで当センターでは最新の成果をいち早く、県民をはじめとする多くの方々に見ていただきたいとの思いから、前年度の発掘調査の内容を「発掘調査速報展」として毎年公開しています。

今回は、新たな試みとしてうるま市教育委員会と宮古島市教育委員会がそれぞれ発掘調査をおこなった「藪地^{やぶちどうけつ}洞穴遺跡」、「ツツビスキアブ（丘陵頂上部近くを貫通する洞穴）」を含め、県内8地区の発掘調査について、出土遺物や写真パネル（ただし、石垣市「白保^{しらほ}竿根^{さおね}田原^{たばる}洞穴遺跡」は、写真パネルのみ）などを通して紹介します。

また、昨年度は首里城跡正殿地区から出土した金属製品の保存処理も実施しています。そこで、保存処理に加え、錆^{さび}等の除去や欠損部を修復した金属製品も展示することになりました。

当センター等が行った発掘調査及び保存処理を通して、多くの方々が遺跡や遺物などに接し、先人たちの暮らしに想いを馳^はせるとともに、沖縄の歴史と文化に対して親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

平成29年8月1日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城 亀 信

平成28年度発掘調査

沖縄本島



旧キャンプ跡地
西普天間住宅地区〔宜野湾市〕
グスク時代～近代



藪地洞穴遺跡〔うるま市〕
縄文時代～弥生から平安並行期



大嶺村跡〔那覇市〕
近世～近代



県営首里城公園内
中城御殿跡〔旧国立博物館〕〔那覇市〕
グスク時代～近代



県営首里城公園内 真珠道跡〔那覇市〕
グスク時代～近代



円覚寺跡〔那覇市〕
グスク時代～近代

実施箇所一覧

宮古諸島



ツツビスキアブ〔宮古島市〕

旧石器時代(後期更新世)～近世



八重山諸島



白保竿根田原洞穴遺跡〔石垣市〕

旧石器時代(後期更新世)～中森期(グスク時代)



にしふてんま 旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

平成 27 (2015) 年 3 月 31 日に返還された旧キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区の跡地利用に伴い、文化財の適切な保護・活用のため埋蔵文化財の有無や遺跡の範囲を把握する目的で、平成 27 (2015) 年度から宜野湾市の依頼を受けて同地区の調査に参加しています。

平成 28 年度は、宜野湾市教育委員会の分布調査で確認されている喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第三遺跡、喜友名山川原第七遺跡、喜友名西原遺跡、喜友名古水田跡などの範囲と内容を把握するため、試掘調査及び確認調査を行いました。

調査の方法

試掘調査は、西普天間住宅地区を東西南北に 30 × 30 m で区切ったグリッドを基準に、希少な植物が群生する場所を避けて設定した 4 × 4 m もしくは、2 × 3 m の試掘坑 40 力所について実施しました。試掘調査後は、遺跡の広がりや把握するため、遺構や遺物が確認された試掘坑を広げてトレンチを設定し、確認調査を実施しました。その結果、以下の成果を得ることができました。

調査の成果

調査の結果、喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第三遺跡、喜友名山川原第七遺跡の範囲に含まれる試掘坑及びトレンチで、近世～近代からグスク時代にかけての遺物や遺構が見つかりました。

近世～近代の成果としては、沖縄産の陶器や国内外の陶磁器類のほか、近代の耕作に関係すると考えられる溝跡や堆積層を確認することができました。

グスク時代の成果としては、建物の柱跡や土器、徳之島産カムイヤキ、中国産の白磁や青磁、長崎県産の滑石製石鍋の破片、鉄滓などを確認しました。特に、喜友名下原第二遺跡では、試掘調査で建物の柱跡が確認されたことから、試掘坑を広げて確認調査を実施しました。その結果、柱跡の広がりや認められただけでなく、炉跡や県内でも類例が少ない円弧状の遺構、柱跡内に土器がまわって廃棄された状況が確認され、大きな成果を得ることができました。

Data

事業名 基地内文化財分布調査 所在地 宜野湾市西普天間住宅地区 (旧キャンプ瑞慶覧)

調査面積 (試掘調査) 試掘坑 40 力所 (281㎡) (確認調査) トレンチ 4 力所 (483㎡)

調査期間 (試掘調査) 平成 28 (2016) 年 7 月 1 日～9 月 4 日 (確認調査) 同年 9 月 5 日～12 月 8 日



図1 西普天間住宅地区と調査実施箇所的位置

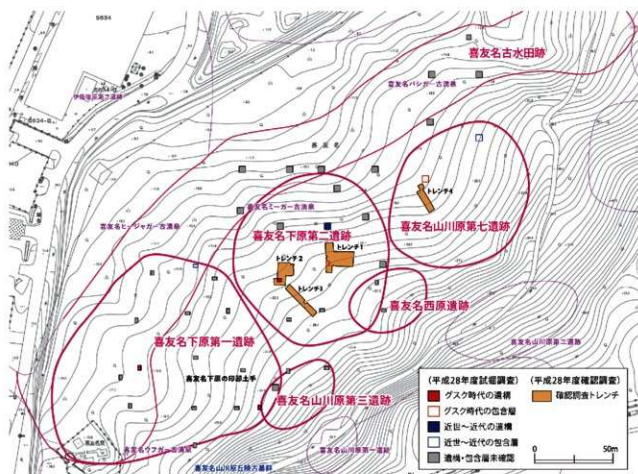


図2 平成28年度 試掘調査及び確認調査実施箇所



写真1 きよなしちやげん 喜友名下原第二遺跡 建物の柱跡 (トレンチ1)



写真2 きよなしちやげん 喜友名下原第二遺跡 えんこ 円孤状の遺構 (トレンチ2)



写真3 きゆうなしたちやばる 喜友名下原第二遺跡 柱穴内への土器廃棄状況 (トレンチ1)



写真4 きゆうなしたちやばる 喜友名下原第一遺跡 建物の柱跡

おおみねむらあと 大嶺村跡

近世～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

発掘調査の経緯

この調査は、那覇空港拡張工事に伴う那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に先立ち、建設予定箇所に存在する埋蔵文化財の発掘調査を行ったものです。那覇市文化財課が事前に行った試掘調査によって、この場所には戦前まで所在していた大嶺村の遺構が残されていることが分かっています。



発掘調査実施箇所と地区名

大嶺村の歴史

大嶺村は、『琉球国由来記』(1713年)や、冊封副使の徐葆光が残した『中山傳信録』(1721年)に記録されています。明治になると小禄間切大嶺村から小禄村字大嶺となり、昭和には旧日本軍小禄飛行場が建設されました。戦後は米国民政府管理の那覇飛行場、本土復帰後は那覇空港として利用され、現在に至っています。



琉球国惣絵図(間切図)の大嶺村 (1750年頃)
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



大嶺集落と小禄飛行場 (1945年1月3日)
(国土地理院所蔵)

Data

目的 那覇空港管制塔庁舎新築及びケーブルダクト設置に伴う記録保存調査 調査面積 約3000㎡

所在地 那覇市小禄大字大嶺(那覇空港内) 調査期間 平成28(2016)年3月1日～7月20日



土層堆積状況

Ⅱ層
Ⅲ-1層
Ⅲ-2層
Ⅲ-3層
Ⅴ層

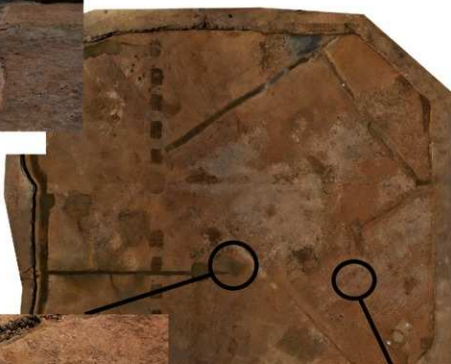
土層模式図

管制塔Ⅰ地区では、大嶺村の遺構が作られた海浜堆積物層（Ⅴ層）の上に、炭や多量の遺物が含まれた戦後直後とみられる黒色の砂層（Ⅲ層）が堆積しています。その上には米軍那覇飛行場から本土復帰後の那覇空港時代の造成土（Ⅱ層）や空港内の道が確認されました。

管制塔Ⅰ地区では、最下層の海浜堆積物層から大嶺村のものとみられる遺構が検出されました。遺構には、方形に区画された溝や、集落の外れにウマやブタの幼獣を埋葬した土坑などが確認されました。中でもウマは、体高から在来馬ではない種類とみられる点で注目されます。



溝跡



ウマが埋葬された土坑



ブタ幼獣が埋葬された土坑

管制塔Ⅱ地区の調査成果

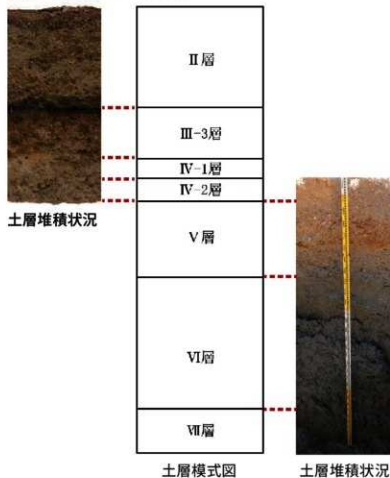


管制塔Ⅱ地区では、約2.7m下まで戦後から現代にかけての造成土が厚く堆積していました。その下には自然に堆積した海浜堆積物層や、琉球石灰岩が確認されました。この地区から遺構は確認されませんでした。造成土からは近世・近代の遺物が現代のものに混ざって出土しています。

エブロン地区の調査成果

エブロン地区では、島尻泥岩層しまじりでいがん（Ⅶ層）が基盤で、その上に灰色の海浜堆積層（Ⅵ層）、海浜堆積層及び白砂層（Ⅴ層）が堆積します。その上に遺構のある粗砂層あらすな（Ⅳ層）が確認されました。

その上は管制塔Ⅰ・Ⅱ地区と同じように、戦後直後とみられる層（Ⅲ-3層）、戦後から那覇空港時代の造成土層（Ⅱ層）や建造物がみられます。





エブロン地区では、大嶺村の時期とみられる多数の柱穴跡や礎石の抜け穴などが確認されました。特に狭い範囲に3基も検出された井戸や遺物廃棄土坑、集石遺構などが注目されます。



エブロン地区では、約500㎡内に3基の井戸が発見されました。そのうち、右下写真の井戸は、IV-1層で埋められ、かつ構造も異なっていますので、上の2基より古い可能性があります。



様々なゴミを捨てた穴（遺物廃棄土坑）も見つかりました。この中には沖縄や日本で作られた様々な種類の陶磁器や、ブタの骨や貝殻などの食糧残滓でんじが含まれています。

出土した遺物



先史時代の土器



中国産青磁 (古くは) (古スク時代)



遺物廃棄土坑から出土した主な遺物



「陸軍第四十五聯隊酒保」銘 歯ブラシ柄



稲モミが混入した
瓦質土器製の焜炉



貝殻圧痕が残る壺

県営首里城公園内 真珠道跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成 28(2016)年に「真珠道跡」の発掘調査を実施しました。今回の調査では、戦前まであった真珠道の跡とこれに隣接する国王頌徳碑の範囲・状況を確認することを目的としています。この調査成果は今後の首里城公園の整備のための基礎資料となります。

真珠道について

真珠道は尚真王代(1477～1527)に首里王府によって整備された道です。真珠道は石敷きで、当初は首里から真玉橋(現在の豊見城市)までの約4kmが整備されましたが、その後1553年には那覇港(現在の住吉町)まで延長され、約8kmの石畳が続いていました。

真珠道が整備された理由は、当時東アジア各地で猛威を振るっていた倭寇への対策だったとされています。尚真王是那覇港に倭寇が来襲した際には兵を派遣し、南風原、豊見城の真玉橋を通り那覇港の南側(垣花)へ向かわせたと真珠湊碑文に記されています。

国王頌徳碑について

国王頌徳碑(建立1522年)は尚真王の功績が記された石碑で、真珠道の東側にあったことから石門之東之碑文とも呼ばれていました。碑文には尚真王の功績として、それまで100年以上続いていた国王が亡くなった際の殉死を禁じるなど仁政を施したことが記されています。



国王頌徳碑(左)と真珠湊碑(右)

(現在は、復元された碑が首里社館の前に設置されている)

Data

目的 遺構の範囲確認調査

所在地

那覇市真和志町1丁目7番1地先

調査面積 約71㎡

調査期間 平成28(2016)年8月

1日～10月31日

調査の成果

調査の結果、当初調査区の東側で確認できると想定していた国王頌徳碑と石碑を囲う石積みは、戦後の造成時に壊されており、これらに伴う遺構は確認できませんでした（**オレンジ部分**）。

この他、今回新たに溝状遺構を検出しました。溝状遺構も戦後の造成による影響を受けており、石積みの一部が外され水道管が通されていますが、地山に切り石を2段積み上げる様子や堆積の状況から当時は蓋石があった可能性があることが判りました（○が外された箇所）。遺構の傾斜の様子から、溝状遺構は南からカーブして東へ流れる暗渠であったと思われます。

また真珠道跡に関する遺構として石列遺構を検出しました。検出したのは真珠道の東側にあったとされる石牆の根石部分と考えられますが、その上の石積みは戦後の造成による影響を受けており確認できませんでした。

まとめ

今回の調査では戦後の造成により当初想定していた国王頌徳碑に伴う遺構を確認することができませんでしたが、南から東に向けて延びる溝状遺構、真珠道跡に伴う石牆の一部を確認することができました。これらの遺構の詳細については、今後遺物や堆積状況を整理し検討を行い、真珠道跡及び国王頌徳碑の復元の基礎資料としていく予定です。



調査区遠景（写真下が南）

溝状遺構

切石が2段に積まれており、南から東へ地形に沿って傾斜しています。
この溝状遺構は東側の状況から当初は溝が設置されたと考えられます。



真珠濠碑に伴う遺構

過去の調査では真珠濠碑が設置されていた基礎部分やこれを囲う石積み遺構が確認されています。



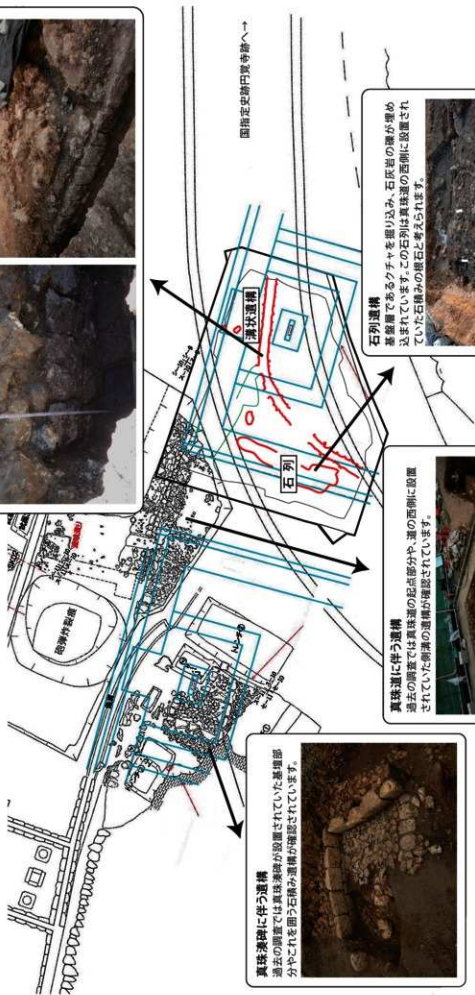
真珠濠に伴う遺構

過去の調査では真珠濠の起点部分や、濠の西側に設置されていた明溝の遺構が確認されています。



石列遺構

石敷層であるクチャを掘り込み、石灰岩の礫が埋め込まれています。この石列は真珠濠の西側に設置されていた石積みの礎石と考えられます。



国指定史跡 円宮寺跡へ

えんかくじ 円覚寺跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

円覚寺の概要

円覚寺は、1492年から約3年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院です。尚真王（第二尚氏王統第三代）が父親である尚円王の御霊を祀るために建立したと伝えられ、第二尚氏の菩提寺でもありました。現在は国の史跡に指定されています。

かつて円覚寺の境内に数多く存在した建造物は、沖縄戦により首里城とともに破壊されてしまいましたが、平成9（1997）年度から平成13（2001）年度にかけて、往時の姿を復元することを目的に遺構確認調査が行われ、建物の基礎遺構や円覚寺の外周を囲う石牆の一部が残っていることが分かりました。その調査成果などを基に、翌年の平成14（2002）年度からは、石牆の復元整備を実施しています。

調査の成果

平成28年度は、かつて存在した三門の復元整備に向けた遺構確認を目的として、発掘調査を行いました。

トレンチ1では、三門の基壇の縁石と考えられる石列が見つかりました。この石列は過去の調査で見つかった基壇とつながることより、三門の基壇の規模を知る大きな手がかりとなります。また、石列の片側には段が確認されます。この段は塼を敷くための加工と考えられます。

トレンチ2では、土留め遺構の検出を想定していましたが、ガラス片などの現代遺物が混じる攪乱の土層が続き、遺構は確認できませんでした。

トレンチ3では、多くの瓦片がまとまって見つかりました。三門は瓦葺きの建物であったことより、これらの瓦片は、葺き替えの際に廃棄されたものとも考えられます。



三門地区（南東から撮影）

Data

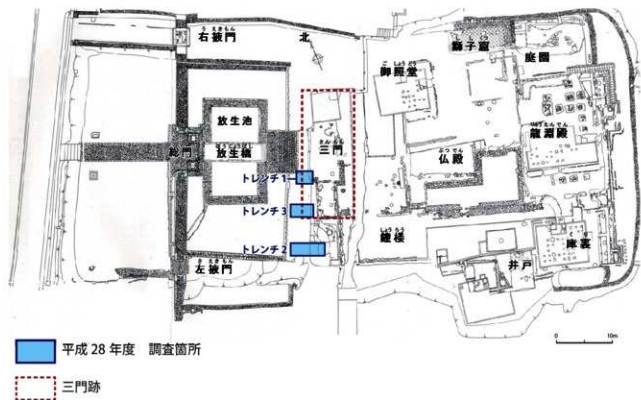
事業名 円覚寺跡 遺構確認調査

所在地 那覇市首里当蔵町2-1

調査面積 約30㎡

調査期間 平成28（2016）年7月

1日～9月26日



遺構全体図



三門地区 遺構検出状況 (写真下が東)



トレンチ1 石列 (北東から撮影)



トレンチ3 検出された瓦片 (東から撮影)

なかくすくうどうん 県営首里城公園内 中城御殿跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

中城御殿跡の発掘調査は、県営首里城公園整備を目的として、平成19（2007）年度より遺構確認調査が開始され、これまでに石造の側溝や石畳、石積み、階段、庭園の池などの遺構が良好な状態で遺されていることがわかっています。

平成28（2016）年度は昨年度に引き続き、敷地内北西部の上之御殿と呼ばれる地区を対象に調査を実施しました。

中城御殿の概要

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、明治3（1870）年に、大中町に新御殿の造営が開始され、明治8（1875）年に移転します。そして、明治12（1879）年の琉球王国の崩壊を経て、昭和20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地に存在していました。戦後は一時、引揚者たちのバラックが建てられ、のちに首里市役所、首里バス会社の敷地として使用されましたが、昭和40（1965）年に琉球政府により敷地が買い取られ、琉球政府立博物館の建物が新築されました。その後、博物館は昭和47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称され、平成21（2009）年に解体されるまで存在していました。



中城御殿跡位置図



平成28年度調査箇所（写真下が南）

Data

事業名	首里城公園発掘調査	所在地	那覇市首里大中町1丁目1番地
調査面積	約130㎡		
調査期間	平成28（2016）年10月12日～11月11日		

調査の成果

上之御殿と呼ばれる地区では、平屋の建物を中心に南側には庭園、東側には御寮が配置されていたとされます。平成 28 年度の調査では、調査区を 2 か所設置し、庭園と、中城御殿の周縁を囲む石牆の遺構を確認するための遺構確認調査を行いました。

トレンチ 1 では、平成 27 年度の調査で見つかった庭園遺構の続き西側部分と、庭園遺構につながる石列を確認しました。石列は南北の外縁に走る石牆と並行して延びており、サブトレンチにて堆積状況を確認したところ、中城御殿当時の造成層直上に積まれることが確認できました。これらのことから、石列は南北の石牆の内側にあたる部分である可能性が考えられます。

遺物については、庭園遺構の客土から、瓦、沖縄産、本土産の陶磁器類、釘などの金属製品類などが出土しました。

トレンチ 2 では重機による掘削を行いましたが、戦後から現代にかけての造成層が堆積しており、石牆の北側部分を確認することはできませんでした。石牆は、調査箇所より東側に存在する可能性が考えられます。

これらの調査成果については今後詳細な整理検討を行い、上之御殿地区の全体像を明らかにするための資料としていく予定です。また、平成 29 年度はトレンチ 1 で検出された石列の延長部分の調査を行う予定となっています。



トレンチ 1 全景（北西から撮影）



トレンチ1 せきれつ 石列検出状況 (北から撮影)



トレンチ1 せきれつ 石列堆積状況 (東から撮影)

しらほさおね たばるどうけつ いせき 白保竿根田原洞穴遺跡

旧石器時代（後期更新世）～中森期（グスク時代相当）

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

白保竿根田原洞穴遺跡は、新石垣空港建設工事に伴う分布調査により発見された遺跡です。平成22（2010）年度には工事にかかる範囲において緊急発掘調査を行いました。この調査で出土した人骨から抽出したコラーゲン（タンパク質）の年代を測定した結果、約2万年前とする結果が得られ、人骨から直接的に年代を測定したものではありません。国内最古として、関連する学会やマスコミの注目を集めました。

その他、遺跡からは約2万年前の旧石器時代から約500年前の中森期（グスク時代相当）までの遺物や堆積層が確認され、約2万年前には石垣島に人類が到達していたことを明らかにするとともに、洞穴が長期にわたり断続的に利用されてきたことがわかりました。このような重要な成果から、遺跡の中心部が空港の敷地内に現地保存されることになりました。

その後、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、平成24（2012）年度から平成28（2016）年度まで、文化庁の補助を受けて重要遺跡確認調査を行っています。

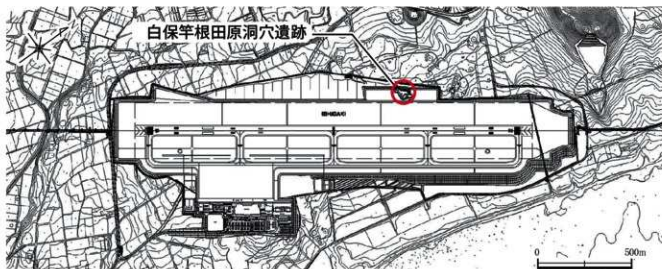
平成28（2016）年度は、6月末から7月初旬の2週間にわたり、H4区に残された人骨の回収および遺跡の3次元計測作業を行いました。この期間中には、遺跡周辺において石器として利用できる石材の分布を確認する目的で、西表島、小浜島で石器石材調査を行い、石垣市民向けに現地説明会を開催しました。

調査にあたっては、出土遺物の分析についての配慮や、出土状況の再検証が可能なように、検出や記録、取上げ、運搬、分析試料サンプリングに至るまで慎重かつ迅速に行うよう努めました。

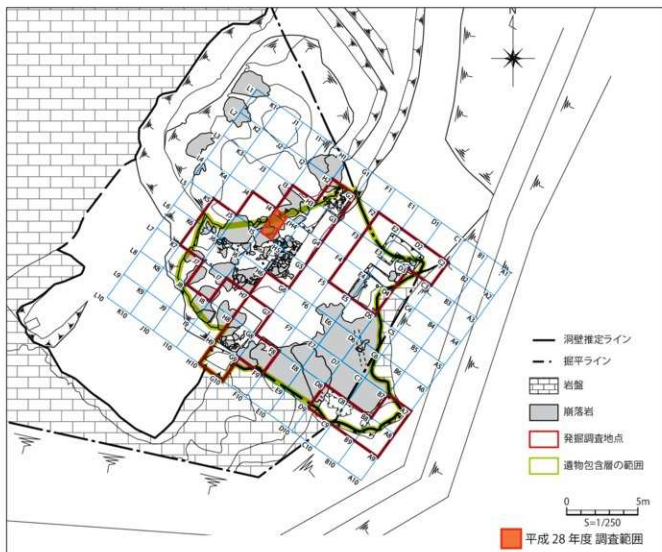
その結果、平成26（2014）年度から継続して調査を進めているH4区岩陰内のⅢE層（約2万4千年前BP）から、約90点の人骨片を回収し、人骨の最終的な点数は1,100点を越えることがわかりました。その後、資料整理作業とともに各種分析が進められ、骨の組み合わせによる個体識別から、少なくとも19人分の人骨が存在していたと推定され、中でも保存状態がよい人骨は白保1号～4号と名づけられました。

これらの人骨は、現地調査で出土状況や3次元の位置情報を記録しています。その検証から、5ヶ所に集中分布することが判明したため、そこから洞穴が人骨を安置した墓であった可能性が考えられます。また、人骨の表面には石灰質の付着物やネズミなどの動物がかじった痕が残ることから、長期間埋められずに地表に露出していたことがわかっており、遺体を埋めずに安置する「風葬」が行われていたと考えられます。この結果は、旧石器時代の葬送の様子が国内で初めて確認された事例として大々的に報道されました。

発掘調査はこれでいったん終了し、遺跡は現地保存されることとなりますが、洞穴と遺跡の形成、人骨や動物骨、土器などに関する分析・研究は今後も続けられることとなります。



白保竿根田原洞穴遺跡の位置



平成28年度調査範囲

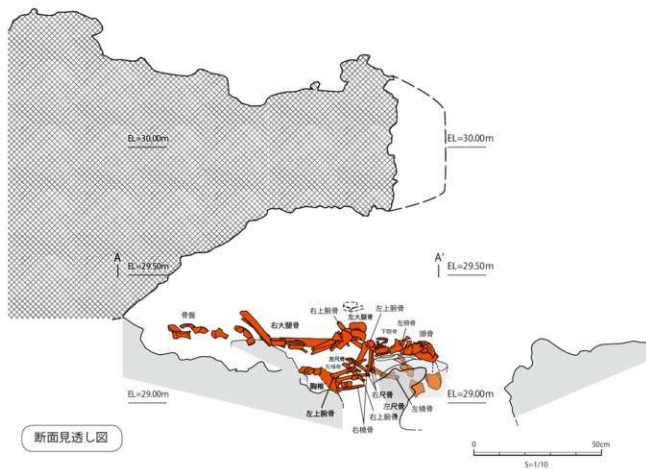
Data

目的 重要遺跡範囲確認調査

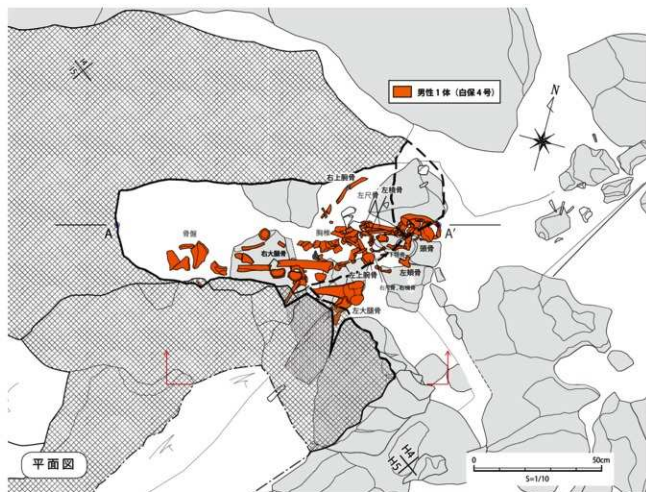
所在地 石垣市宇白保（新石垣空港敷地内）

調査面積 約2㎡

調査期間 平成28（2016）年6月27日～7月8日



断面見透し図



平面図

H4区ⅢE層 白保4号人骨出土状況 平・断面図



調査状況



H4区 4号人骨が眠る岩陰



白保1号～4号人骨

藪地洞穴遺跡

縄文時代～弥生から平安並行期

調査主体：うるま市教育委員会

はじめに

藪地洞穴遺跡は、勝連半島の東北側に位置する藪地島にある洞穴遺跡です。昭和35（1960）年に國分直一氏、嵩元政秀氏らによって初めて発掘調査が行われました。その時、約6,500年前の爪形文土器が発見されたほか、貝殻を加工して作った鎌などが発見され、沖縄の先史時代を研究する上で重要な成果が得られました。

最初の発掘から50年以上が過ぎ、遺跡の重要性を改めて確認するために平成26（2014）年度から発掘調査を開始しました。今回の調査では、洞穴の入口付近と洞穴内部の発掘調査をしました。

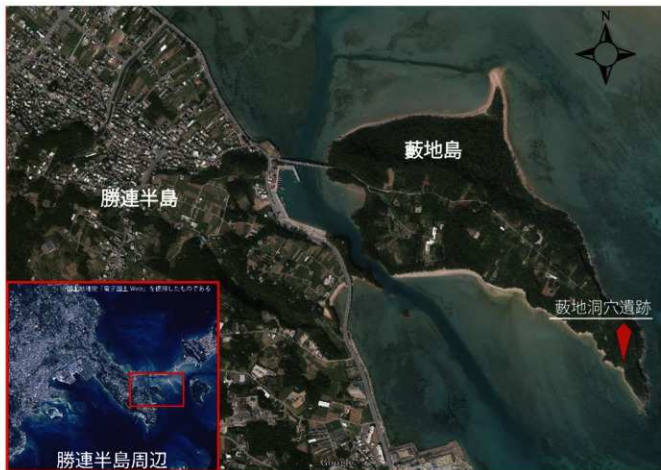


図1 藪地洞穴遺跡位置図

Data

目的 試掘調査

所在地 うるま市と那城屋慶名東藪地

調査面積 計23.5㎡ (TP1 = 4㎡、TP2 = 4㎡、TP3 = 7.5㎡、TP4 = 4㎡、TP5 = 4㎡)

調査期間 平成26（2014）年11月～平成27（2015）年1月、平成27（2015）年6月～9月
平成28（2016）年6月～9月



図2 藪地洞穴遺跡前景写真

調査の方法

調査は平成26年度から平成28年度まで行い、洞穴前庭部から洞穴奥部に計5箇所のトレンチ（TP1～TP5）を設定し発掘しました（図3）。

発掘は地表面から人力で掘り下げていきました。洞穴奥部のTP3については、地表面が地下水に含まれる石灰分が結晶化したフローストーンにより固く覆われていたため、削岩機（きくろん）を用いて表層を割りながら掘り進めました。

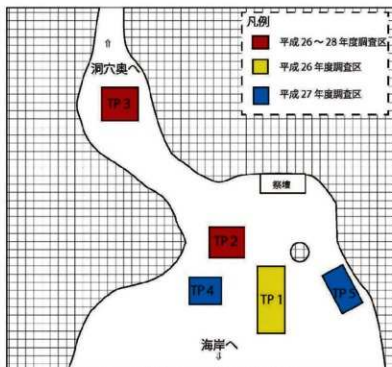


図3 試掘トレンチ位置 概略図

調査成果

調査した5箇所のトレンチのうち、大量の遺物が出土したTP2とTP3の成果について紹介します。

～調査区2（TP2）の成果～

洞穴の入口部分の調査区2（TP2）では、おびただしい量の約6,500年前の爪形文土器の破片が重なり約10cmの層となって出土しました。また、同じ層からは局部磨製石斧きょうくぶまがひいばきが4点まわって出土し、貝の殻やイノシシの骨などが土器に混じって出土しました。このような状況は、県内で事例がなく、どのような目的で土器片やそのほかのモノが集められたのかはわかっていません。今後、これらの謎を解明するために調査を進めていきます。



図4
遺物（爪形文土器、局
部磨製石斧、貝の殻）
出土状況



図5
おびただしい量の
爪形文土器の出土状況

～調査区3（TP3）の成果～

洞穴の奥にある調査区3（TP3）では、地表面を覆っていた固いフローストーンを割って掘り進めると、なかから土器片や貝殻が多数出土しました。土器は文様が無いものが多いですが、なかには波状文などの文様を持つものもありました。地表下約70～80cmの層からは、貝殻やイノシシの骨に混ざって土器片も多数出土しました。この層の年代を測定したところ9,000年以上前の地層であることがわかりました。

このような年代の遺跡は県内には非常に少なく、この頃の生活の様子は全くわかっていません。今回出土した貝殻や骨、土器を分析することで、当時の人々が何を食べていたのか、どんな道具を使っていたのかなど生活の様子が少しずつわかってきます。

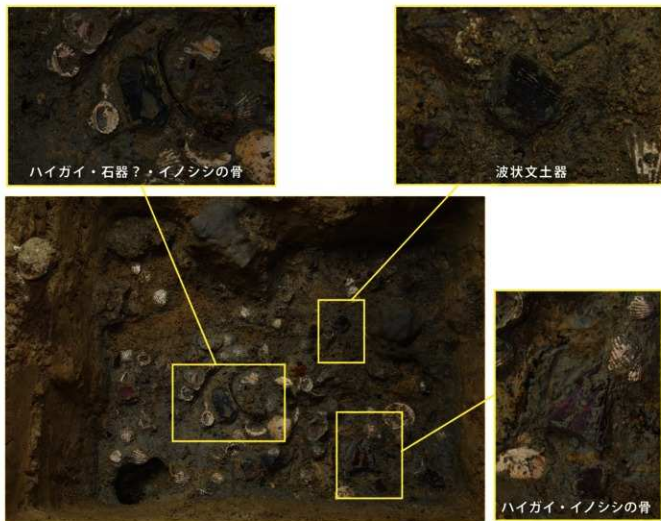


図6 TP3遺物出土状況

おわりに

今回の調査で、1960年に行われた調査成果を再確認するとともに、洞穴の入口付近での爪形文土器が厚く堆積する状況や、奥部での土器や貝殻の出土など人の生活の痕跡を確認できたことは、新たな発見となりました。

当遺跡は、これらの貴重な発見があり、遺跡の重要性から平成29年3月17日にうるま市の指定史跡になりました。

ツツピスキアブ

旧石器時代（後期更新世）～近世

調査主体：宮古島市教育委員会

ツツピスキアブの発掘調査では、約10,000～20,000年前の層（IV-1・2層）と、約24,000年前の層（IV-3層）で人の生活の痕跡が確認されました。約10,000～20,000年前の層からは、イノシシの骨が多く出土し、シカ、ネズミ、コウモリなどの動物骨とともにチャート製の石器や人骨も出土しています。また、約24,000年前の層からも人が使用したと考えられる炭化物がまとまって検出される面があり、これらの時代に宮古島には人が存在していたことが明らかになってきました。



発掘作業風景



発掘作業風景



土層堆積（●の地層は約10,000～20,000年前、◆の地層は約24,000年前）



約24,000年前の炭化物の検出状況
棒の立っている場所が炭化物の出土位置を示します。

Data

目的

確認調査

所在地

宮古島市平良字下里嶺原 1068 番地

調査面積

18㎡

調査期間

平成21（2009）年～平成26（2014）年

IV -1・2層（10,000～20,000年前）の発掘状況



石器出土状況



石器2出土状況



遺物出土状況

遺物の出土した場所に竹串をさしています。



イノシシの切歯

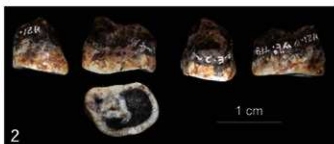
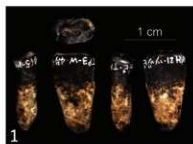


チャートの円礫



動物骨出土状況

出土した動物骨は、歯が多く、骨の出土は少量でした。



◀人骨

2点の人骨。

1は前歯に近い部分の歯（上顎小白歯）で、
2は奥歯（上顎大白歯）
になります。



1



2



3



4

▲石器

1～3は、チャートとよばれる岩石で、人為的に打ち割った加工がみとれます。4は、砂岩と呼ばれる岩石で、磨り石として使用されています。

チャートの円礫▶

人的な加工は見られないものの、チャートの円礫が多く出土しています。



▲シカ骨

シカ骨の出土量は少ないが、大型でミヤコノロジカと考えられます。



▲イノシシ骨

イノシシ骨の出土の大部分は歯で、骨の出土は非常に限られていました。



▲小型動物（コウモリ）の骨

1～3：オオコウモリ属、4～5：キクガシラコウモリ属、6～11：カグラコウモリ属

県内出土遺物保存処理

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターの発掘調査で出土した遺物の中には、金属製品や木製品、石造物など時間とともに劣化^{ひよろ}していく材質のものが含まれます。この事業では、これらの遺物について長期的な保存や公開等に活用するため、化学処理を行っています。

対象資料と成果

平成 28 年度は、首里城跡正殿地区^{しゅりじょうあとせいでん}から出土した青銅製品・鉄製品のうち、38 点の保存処理を実施しました。化学処理には専用的高額な機材や薬品が必要なため、専門とする業者に委託しました。

専門的なクリーニングと化学的な保存処理を行ったことで、耐久性^{たいきゆうせい}が増し、長期的な保存や積極的な活用ができるようになりました。

処理前



処理後



鉄製兜鉢^{かぶとぼち}



梵鐘^{ぼんしょう}

Data

目的 脆弱^{いじやく}な出土遺物の保存処理

点数 38点

調査期間 平成 28 (2016) 年 7 月 27 日～平成 29 (2017) 年 3 月 31 日

保存処理の作業工程



① X線透過撮影



② クリーニング



③ 安定化・脱塩処理



④ 樹脂含浸



⑤ 含浸後の乾燥



⑥ 樹脂塗布

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的としています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく3つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価をおこなうための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなる遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないわけですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては発掘調査を実施している市町村教育委員会、若しくは以下にお問い合わせください

○沖縄県教育庁文化財課 記念物班 埋蔵文化財担当 TEL 098-866-2731

○沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 TEL 098-835-8752

発掘調査速報展 2017

■主催

沖縄県立埋蔵文化財センター

■共催

うるま市教育委員会

恩納村教育委員会

宮古島市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター

発掘調査速報展2017

発行日：平成 29（2017）年 8 月 1 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www.pref.okinawa.jp/edu>

関連文化講座のご案内

発掘調査速報 2017

会場：当センター研修室

定員：各 140名 **予約不要/参加無料**

2017年 8月5日(土) 13:30～

- 西普天間住宅地区〔宜野湾市〕
- 真珠道跡〔那覇市〕
- 大嶺村跡〔那覇市〕
- 円覚寺跡〔那覇市〕
- 中城御殿跡（旧県立博物館）〔那覇市〕

2017年 8月12日(土) 13:30～

- 白保竿根田原洞穴遺跡〔石垣市〕
- 敷地洞穴遺跡〔うるま市〕
- ツツビスキアブ〔宮古島市〕

次回の催し

沖縄の先史時代展(仮)

2017年10月24日(火)～11月26日(日)

首里城京の内跡出土品展

2018年2月20日(火)～5月13日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL:098-835-8751

【開所時間】午前9時～午後5時(入所は午後4時30分まで)

【休所日】月曜日、国民の祝日(こどもの日、文化の日は開所)、年末年始 ※月曜が祝日の際は翌火曜も休所